
壁を越えろ

エデンの守護者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壁を越えろ

【Nコード】
N1655Y

【作者名】
エデンの守護者

【あらすじ】
バスケのドリブルで抜く瞬間、シュートを入れる瞬間。
そんなものに魅了された少年と少女の話

第1話・少年は走る

体が疲れてきた。筋肉に力が入らない。ゴールが見えない。

「やめるのか？」そう耳元でささやかれた。

あのときとはもう違う。やめない。やめるわけにはいかない。なんのために走る？自分のためにだ。

そう、崩れそうな体にムチを打って走る。

「限界はある。そう思ったらお前はもう負けだ。」

コーチの言葉だ。

だから俺は走る。体力に限界は、ない。

何も取り柄のない俺、なら作る。

負けるわけにはいかない。次が俺の最後だ。

「はい、終了。30キロ完走したよ。

わかってるの？冬樹？」

「分かってるって。記録は？縮んでたらいけど。」

「うーん、昨日とほぼ同じ。

ってか、30キロでタイム計るってどういう神経？」

それは、誰にも言わない。

言えば、必ず止める。

なんてたって、30キロを全力で走りきるのだから。

マラソン選手だって、走るというより歩く。

サッカーだって4〜5キロそれも全力は瞬間的。

でも、バスケは違う。

常に全力でサッカーと同じ量ぐらいを走る。

そのため、控えが多いのだが、俺は変えられたくない。

コートで40分間、戦っていたのだ。

だから俺は、コートで走る何倍もの距離を走って
どんなことでも全力でいけるようにしている。

「ふう、私そろそろ行くからね。

冬樹も遅れたらだね。」

「分かってるって。

渚、あとで宿題写させて。」

「ヤダ。」

即答!!

いやね、わかってましたよ。

仕方ない、教室でやるか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1655y/>

壁を越えろ

2011年11月4日03時05分発行